Newspaper in Education

# NIEニュース

エヌ・アイ・イー

Newspaper in Education

第102号
2023.7.15

◉特集・紙とデジタル――媒体特性を生かすNIE▶1～3 ◉東京都・子供読書活動状況調査▶4 ◉新聞の「今」――芸能記者の仕事の裏側▶5 ◉アドバイザー紹介／フラッシュニュース▶6～7 ◉〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2023年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL：03-3591-4410（NIE担当） FAX：03-3592-6577 e-mail：nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

## 紙とデジタル――媒体特性を生かすNIE

**GIGAスクール構想の下、小中学校で1人1台の端末配備が実現する中、紙もデジタルも活用するNIE像を探った。NIE全国大会松山大会実行委員会会長から考察を、小中高校の先生方から実践報告を寄せていただいた。**

愛媛県NIE推進協議会会長
NIE全国大会松山大会実行委員会会長
馬越（うまこし） 吉章

第28回NIE全国大会が8月3、4日に開催される。愛媛県では初となる全国大会が、俳句の街・豊かな感性とことばを大切にする文化の根付く松山で実施できることは無量の喜びである。ChatGPTに代表される生成AIなど情報化の進展が著しい現代において、『ICTでひらくNIE新時代』をスローガンに、参会者とともにこれからの未来を考えてみたい。

### ■重要なのは批判的思考■

経済協力開発機構（OECD）の「生徒の学習到達度調査（PISA）2018」では、子どもの総合読解力と新聞の閲覧頻度に相関関係があることが示された。紙（新聞）とデジタル（ICT）のメリットやデメリットについて、一教師として考察する。

紙の新聞のメリットは、政治や経済、地域の旬の話題などの幅広い内容が、記者の眼や経験というフィルターを通して一覧でリアルに、そして正確に獲得できる。常に一定量の話題が提供され、子どもの興味・関心の「種」が随所にある。一方、「ICT」のメリットは、ピンポイントで深掘りが可能な「検索エンジン」機能にある。探究的な学びに効果的であり、成果を花開かせ実を結ばせる可能性は大きい。

デメリットとしては、紙の新聞を使った学びでは、記事に載った情報を深く掘り下げるのに限界があることである。ICTでの学びは、興味・関心のある分野に偏り、受け取る情報が限定されてしまう場合がある。

最も危惧される点は、膨大な情報の真偽にかかる点である。見抜くために「批判的思考」を育てることは学校教育で重要な位置づけとなろう。また、ICT機器の使用については児童生徒の健康面にも配慮すべきである。

### ■全国大会で知恵を共有■

全体会では、俳人の夏井いつき氏による「いのちを守る ことばを育てる」と題する講演で、児童生徒の豊かな感性を育む「ことばの力」を堪能していただく。続いて、様々な立場のパネリストによるディスカッションにより、大会スローガンに迫る。

2日目の分科会では、小・中・高校・盲学校による授業公開や研究発表のほか、クロヌリハイク（新聞記事から季語や語句を抜き出し、周りを黒く塗りつぶして作る俳句アート）のワークショップ、新聞社のデジタル教材に関するミニパネルディスカッションを設定している。これからのNIEを推進していく上での知恵を共有できればと考える。

### ■ベストミックス目指す■

私たちを苦しめてきた1ミリの1万分の1ほどのウイルスとの闘いは、明らかに出口にさしかかっている。1人1台端末の普及は、構想から実施までほとんど時間を要しなかった。しかし、科学技術の進歩は学校教育のそれとは比にならない。生成AIが脅威となるかは、今後、我々の良識にかかっている。

時代の変化をスピーディーかつリアルに提供する「新聞」。それから興味・関心を生かした学びを可能とするツール「ICT」。ベストミックスを目指し、NIEの新時代を共に考えたい。

# 子どもも、教員も、紙に触れて

燕市立大関小学校
校長
大竹　正宏

新聞を購読している家庭が減っており、子どもたちの親世代もSNSを中心に情報を得ていることが多い。そのような環境で育った子どもたちは、新聞を読むことはもちろん、新聞を手にすることすらない。

そこで当校では、まず低学年の段階で、実際に紙の新聞に触れることで、新聞をより身近に感じられるような体験を積ませてきた。新聞をちぎったり、大きな新聞の中から文字を探したりするなど、その体験にたっぷり浸らせることが新聞に対する抵抗感を軽減し、新聞を活用した読解力の向上につながると考えたのである。

## 新聞から興味関心を広げる

1年生の図画工作では、子どもたちは、柔らかい素材の新聞をちぎったり丸めたりして、新聞の感触を楽しんだ。そして、新聞を使ったマイバッグづくりに挑戦。新聞の写真や見出しを切り取って、バッグの模様にするアイデアが生まれ、子どもたちの発想の豊かさに驚かされた。模様に最適なものを探す姿が、あたかも新聞を読んでいるかのようでほほえましかった。

特別支援学級の自立活動では、手先の訓練に、カッターで新聞紙を切り抜く活動を行った。動物が掲載されている朝日小学生新聞の連載「動物園のスターたち」を活用したところ、ある子どもはその動物に興味を示し、写真の部分を上手に切り取ることができた。最後に、その切り取った部分を窓に見立ててあいさつの練習も行い、たっぷり新聞に触れることができた。

制作したマイバッグを手にする児童

2年生の国語では、片仮名を使って表記する言葉の種類を知る学習で新聞を活用した。子どもたちは見出しに着目して、片仮名探しに夢中になって取り組んだ。そして、「あずきアイス」のように、平仮名で書く言葉と片仮名で書く言葉には決まりがあること、「物の音、動物の鳴き声」は片仮名で表すことに気づくことができた。さらに、本文にも興味を示して、実際に読んでみたり、言葉の意味を質問したりする子どももいた。

低学年でも新聞に触れる中で、様々なことを発見でき、自分の興味関心を広げるきっかけとなった。

当校では放課後、短時間ではあるが、教職員もNIEタイムを実施した。「教師自身も新聞離れがあるのでは」との考えからである。新聞を読み合い、「これは！」と思った記事に付箋を貼る姿が見られ、「新聞は教材の宝庫である」ということを改めて実感できたのは、大きな成果である。

子どもも教職員も、新聞に触れること、活字に慣れ親しむことが、新聞を活用した授業づくりの第一歩ではないだろうか。

# 検索機能を調べ学習に

坂井市立坂井中学校
教諭
新郷　瑠那

2024年春、北陸新幹線金沢―敦賀駅間が開業する。開業後は、ビジネスはもちろん、北陸への観光利用による地域経済の発展が期待されている。事実、東京―金沢駅開業後は北陸地域へのオフィス移転や、新規店舗等の出店などの動きも見られ、地域経済の活性化に大きな影響を与えている。その一方で、北陸地域の人口や産業が東京へ流出することが懸念される。24年の開業に向け、産業育成が必要不可欠である。そこで、地元である福井県の産業の課題や取り組みについて、新聞記事をもとに考えさせる実践を行った。

## 産業育成策を考える

2年生地理「中部地方」の単元では、「福井県の産業を育成するには、どのような取り組みに力を入れるべきか」という学習課題について、新聞記事を活用した学習を行った。統計資料から考えられる福井県の強みと課題をふまえ、県の産業育成の取り組みについて、福井新聞のデジタル学習教材「ふくe刊」の検索機能を用いて調べさせた。

記事を読んで生徒は、「駅弁の自動販売機の設置は、新幹線の観光客に、福井産の食品を使った料理への興味をもってもらえる」「田んぼのイルミネーションは、高い水田率を生かした取り組みでよい」「伝統工芸の

技術を生かしたキャンプ用品は、幅広い世代に福井の伝統産業を知ってもらえる」「観光アプリは観光地の紹介だけではなく、クーポンなどもあり魅力的だ」など、自分の考えをまとめていた。さらに、取り組みをより良くするための方法について考え、ワークシートにまとめさせた。

次時には、生徒が選んだ記事のうち似ているものを６つのグループに分け、記事をもとに期待される効果や改善策について話し合い、最善のプランを練る活動を行った。最後に各グループの提案から最善策を選ぶ投票を行った。その結果、駅弁の自販機設置の記事を選んだグループによる「駅弁だけではなく福井の特産品なども置いたらどうか。高いネット普及率を生かし、地元の人々もＳＮＳで情報を発信することで福井の産業の魅力を知ってもらおう」という提案が選ばれた。調べ学習からグループでの話し合い、発表まで、記事から地域の産業の取り組みについて知り、友人の考えも取り入れながら、産業を活性化するアイデアについて熱心に考える姿が見られた。

本校では、毎週金曜日朝の15分間、１・３年生は新聞紙、２年生はふくｅ刊を用いて、記事の要約と感想を書く活動を行っている。授業実践後は、地域産業の活性化の記事を選び、取り組みの良いところやさらに活性化させていくためのアイデアについての記述が見られるようになった。今後は、新聞を有効に活用しながら、身近な地域への関心をもち、よりよい未来の創造のために、課題を解決していく態度を身につけさせたい。

# 電子新聞で主権者育成

東京都立清瀬高等学校
主任教諭
小松　純

２０２２年４月、民法改正により成年年齢が引き下げられ、多くの高校生は卒業を迎える前に有権者となり、主権者としての自覚や行動が求められることとなった。21年の衆院選では、投票権のある当校生徒の65・９％が投票に行った。全体の投票率（55・９％）は上回ったが、前任校と比較すると30ポイントも低い状況にあった。そこで22年の参院選に合わせ、３年生の授業で主権者教育を見直す取り組みをスタートさせた。

まず、東京新聞のデジタル版を授業実践の場で活用することとした。３学年はデジタル端末がまだ１人１台配備されておらず、生徒所有のスマートフォンを使用した。授業では、選挙に若者が積極的に参加しているデンマークを事例に、同じ権利を持つ同世代の行動をどのように受け取るのかを考察させた。

新聞社等が提供するボートマッチも活用した。政策に関わる質問への賛否を回答していくと、自身の意見に近い政党や候補者がわかる。実際の投票権の有無に関わらず、全員が自身で選択したスマホアプリで参加し、10分程度で回答を終えた。本来であれば、結果を踏まえて発表の場面を設定するが、投票権を持つ生徒への影響を鑑み、控えている。しかし、授業後に生徒同士で結果の比較や政党の公約に話が及ぶなど、関心が高まっている様子が見られた。

複数のボートマッチを試した生徒もいる。「（同じように回答したのにサービスによって）異なる候補者が出てきたのはなぜ？」「この政党とこの政党って（政策が）近いの？」など各々の結果から、さらに内容を深めて考察している。生徒からは「通学路の選挙ポスターが目に留まるようになった」「投票券が届いて実感がわいた」などの声も寄せられた。

## 新たな学習方法を創出

ほかにも、デジタル版を活用してＳＤＧｓについて学んだり、様々な情報から翌月の円ドル相場を予想したりするなど、新しい学習プログラムの創出にもつなげた。生徒からは、検索の利便性や情報の信頼性に好意的な意見が上がった。半面、「縦書きより横書きの方が読みやすい」「一覧で表示されるとどこまでが記事かわかりにくい」という声もある。

デジタル版は、新聞の保管や管理、授業の準備において、圧倒的に短時間で済むことがわかった。翻訳アプリを使えば、英字紙など海外の多言語の新聞も読め、ツールとしての利便性は非常に高い。活用の幅が広がり、新しい学習プログラムを創出するチャンスにもなり得る。

一方で生徒や保護者にとってはあくまで教材であり、日常で利用する認識は低い。記者の意図をくまず、必要な記事しか読まないという状況も見られる。デジタル化の効果をさらに向上させるためにも、紙の新聞が持つ多面的な要素を活用した学習プログラムで生徒や保護者の意識を補完する必要がある。

# 東京・公立校の活用状況調査
# 全都立高に新聞配備し実践

**東京都が２０２３年３月に結果を公表した「令和４年度子供読書活動推進に関する調査」に今回初めて、新聞配備・活用状況に関する設問が加わった。調査概要と新聞配備の設問を加えた背景について、東京都教育庁の吉田直子氏に、５月26日開催の新聞協会ＮＩＥ委員会で報告いただいた。**

東京都教育庁
地域教育支援部管理課
社会教育施設担当課長
吉田　直子

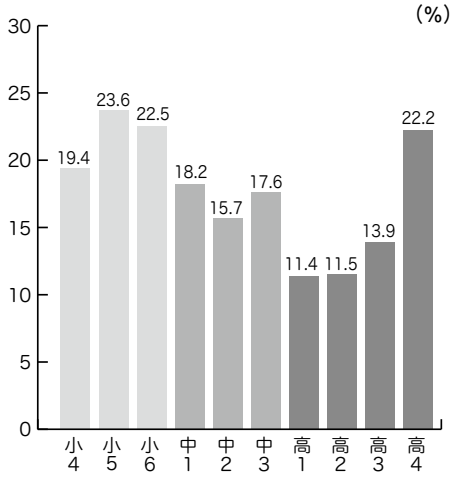
調査は、２０２１～26年度の「第四次東京都子供読書活動推進計画」に基づき、隔年で実施している。都内の子供の読書状況や公立学校図書館における読書活動の現状を把握し、政策に活用することを目的としている。

## コロナ禍で読書機会は減少

小中高校のほぼ全ての学年で、1か月間に本を読んでいない児童生徒の割合が増加した。当初は新型コロナウイルスによる外出自粛の影響で、家庭で読書の機会が増えると予想していたが、全く反対の結果となった。学年が上がるごとに、読書をしていない割合が高まっている。

一方、本に限らず新聞、雑誌などを含めて読んでいると回答した児童生徒に対し、何を読んでいるかを尋ねたところ（複数回答）、最も多かったのは本で86・1％、新聞は15・7％だった（新聞を読んでいると答えた児童生徒の割合は、グラフ1参照）。

グラフ１　新聞を読んでいる児童生徒の割合




※１か月の間に、本、雑誌、学習参考書などを読んだ児童生徒が対象

朝や昼休みに読書時間を設けている学校の割合は、小学校が90・7％、中学校92・8％、高校21・0％で、いずれも前回調査より減少した。また、4月から調査までの間に学校図書館を利用した児童生徒の割合や、ボランティアが学校図書館の運営を支援する学校の割合が、小中学校で減少している。コロナの影響により他の活動に時間を割かれたり、子供が本に触れる機会が減ったりしたことが原因ではないかと考えられる。

## 複数紙を比較して議論

今回初めて新聞配備・活用の状況を調査項目に入れた。新聞による教育効果を高めることが必要だと東京都は認識している。家庭で新聞に接する機会が少ない児童生徒にとって、学校で新聞を読めば接触機会が増える。学校で新聞に触れることへの重要性が増す中で、新聞の配備・活用状況を調査することになった。また、国の第6次学校図書館図書整備等5か年計画に基づき現状を把握し、必要な手立てを行う必要があると考えた。

新聞を使った教育については、①主権者教育②学習や読書活動――における活用を想定している。選挙権年齢の引き下げを受けて東京都は、社会の問題を多角的に考察し判断する力を育成したいと考えている。そのため、都立高校に新聞を配備し、様々な新聞を持ち寄って論調を比較したり、争点を議論したりする活動を行っている。新聞を要約してまとめる、複数の記事を読み比べる、インターネットやテレビの情報と比較するといった活用もされている。

学校図書館では、新聞記事を掲示し、関連する図書と一緒に展示するなどの取り組みを行っている。朝の読書時間に新聞を読む活動を取り入れている学校もある。

高校は全校で学校図書館、普通教室いずれかに新聞が配備されている。しかし、区市町村教育委員会の管轄下にある小学校では60％、中学校は73・9％となっている（表2）。また、新聞配備の費用の予算化には地域差がある（表3）。学校の判断に委ねられている自治体もあり、新聞活用が後回しにされることもある。今後は、区市町村への啓発を積極的に行っていきたい。今回の調査結果や、新聞を活用した事例を蓄積・共有し、広めていくことが重要だ。

表２　学校図書館、普通教室いずれかに新聞を配備している学校の割合

| | 東京都 | 全国※ |
|---|---|---|
| 小学校 | 60.0 | 56.9 |
| 中学校 | 73.9 | 56.8 |
| 高　校 | 100.0 | 95.1 |

※文部科学省「令和２年度学校図書館の現状に関する調査」より抜粋

表３　小中学校への新聞配備の費用を予算化をしている区市町村の数

| | | |
|---|---|---|
| 都全体 | 18 | (62自治体中) |
| 区　部 | 8 | (23自治体中) |
| 市　部 | 3 | (26自治体中) |
| 町村部 | 7 | (13自治体中) |

# 新聞の「今」

新聞の文化面には、文学や音楽、舞台芸術など様々な記事が掲載されており、読者の暮らしを豊かにしてくれる。一見華やかに見える世界の取材には、多岐にわたる知識、専門性が必要となる。文化面の取材の裏側について、執筆いただいた。

## 芸能記者の仕事の裏側

産経新聞東京本社
編集局編集企画部
飯塚　友子

世の中の〝新聞記者〟のイメージは、岸田文雄首相を囲んでメモを取る政治部記者や、事件事故の現場で聞き込み取材をする社会部記者だろうか。新聞社には、ほかに経済部や運動部、そして私が長年、所属した文化部もある。「芸能担当が長い」と自己紹介をすると、大概の人が「誰に取材した？」と興味を示す。ジャニーズ事務所のタレントから歌舞伎俳優まで、がその答えだ。

### 「好き」で専門性を磨く

私は大学時代、「歌舞伎研究会」と「宝塚歌劇を愛する会」に所属していた。舞台オタクで、「新聞社の文化部記者になれば毎日、芝居を見られるのではないか」という安易な考えから、新聞社を目指した。

何とか産経に潜り込んだが、もちろんまずは地方支局であらゆる取材をし、本社でもレイアウトを担う整理部、東京と大阪の社会部も経験、文化部に来たのは35歳の時だ。新聞社は２～３年で担当が変わり、さまざまな経験が積める半面、自分の軸となるテーマを死守しなければ、目の前の仕事に追われ、あっという間に年を取る。

私の軸は舞台芸術。「好き」のパワーは努力に勝る。地方勤務時代は休日に地元劇場に行き、演劇関係の専門誌も複数取り寄せ、それが息抜きにもなった。文化部記者は美術や学芸、芸能の専門性が求められる。取材対象はその道の最前線の芸術家で、気難しい人も多い。伝統芸能の世界でいえば、人間国宝の歌舞伎俳優や、お能の流派家元と一対一で取材する。演目に関する知識や歴史的背景、演者の家系図も頭に入ってないと、相手にされない。私は今も伝統芸能の舞台を見るときは、謡曲本や歌舞伎の脚本を広げて見ている。毎度、必ず気づきがあるからで、伝統芸能の世界は実に奥深く、面白い。

日本の舞台芸術は、新劇やミュージカル、舞踊など多様で、土日や平日夜をつぶしても見きれない。だから丸一日、家にいることがなく、地方での観劇も多々あるので、体力・金銭的にしんどい部分もある。ただ記事の専門性が読者や取材先に認められると、仕事の幅が広がる。

### 発信の仕方も多様に

私は歌舞伎や文楽、能といった伝統芸能や舞台芸術を広め、100年後の日本に伝えたい、と本気で思っている。

ただ紙の新聞が読まれなくなった今、従来のように「いい記事さえ書けばいい」時代は終わった。新聞社もネット記事に軸足を移している今、いい記事を書いた上で、ネット記事をSNSで拡散し、「読ませる」仕掛けも重要だ。媒体にこだわらず、音声や動画などでも発信できる〝歌って踊れる〟専門記者の時代が来ているのである。

かつては「○○新聞の記事」が信頼の証だったが、今は所属媒体より「○○記者の記事」という固有名詞がブランド力を持つ。全国紙のユーチューバー記者や、経済紙のスター記者が独立し、個人で課金コンテンツを発信するのも、時代の流れだろう。

私は現在、会社では文化部を出て、演劇担当も外れている。しかし歌舞伎座の毎月の筋書（プログラム）や、演劇専門誌（隔月刊誌「ミュージカル」「悲劇喜劇」など）からご依頼を頂き、寄稿を続けている。劇場に足を運び、記事をネットの産経ニュースに出すほか、ツイッターの個人アカウントで感想などを発信している。

コロナ禍真っ最中の3年前からは、毎週金曜夜、音声SNS「スペース」でその週に見た舞台の感想を、舞踊評論家らと話し合う「舞台芸術部屋」を主催。昨年9月、東京・新国立劇場で仏オデオン劇場「ガラスの動物園」上演中、その舞台をテーマにスペースを開催したときは、1000人超が集まった。リスナーの中には高名な翻訳家も交じっていて冷や汗をかいたが、終演直後、〝舞台について語りたい〟熱をお互い持ち寄れる音声SNSは、私自身が一番、楽しんでいる。劇場でリスナーと〝オフ会〟のように会うようになり、人の輪も広がった。

舞台芸術はまだ一部の人が鑑賞するもので、その傾向はコロナ禍でさらに強まった。だからこそあらゆる発信手段を駆使し、記録性の高い活字媒体も大切にしながら、舞台芸術を応援する「芸能記者」でいたい。

●埼玉県
**青木　俊樹**
（アオキ・トシキ）
❶さいたま市立針ヶ谷小学校
❷社会　❸12年
❹物事を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力等を育成する主権者教育の充実のため、新聞を子どもたちの身近なものとしたい。

●埼玉県
**内野　正幸**
（ウチノ・マサユキ）
❶城北埼玉中学・高等学校
❷数学・総合　❸２年
❹生徒が負担感なく楽しめることを中心に考え、少しずつ変化させマンネリ化を防ぐ。手段が目的とならないように気を付けている。

●東京都
**浜　彰史**
（ハマ・アキフミ）
❶十文字中学校・高等学校
❷地歴公民　❸５年
❹新聞から、新しい制作物を生み出すことを目指している。成果が多くの目に触れ、反応をもらうことで、制作の楽しさを体験させたい。

●長野県
**油井　玲子**
（ユイ・レイコ）
❶長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課
❷国語　❸４年
❹新聞の活用をきっかけに、授業のねらいや子どもへの向き合い方を見つめ直し、周囲と協働することを大切にしていきたい。

●新潟県
**柳澤　淳**
（ヤナギサワ・アツシ）
❶上越市立雄志中学校
❷社会　❸24年
❹教師が「教えたい・提供したい」記事よりも、子どもたちが「気になる・学びたい」と感じる記事を大切にする。

●富山県
**川島　正樹**
（カワシマ・マサキ）
❶富山県西部教育事務所
❷技術・家庭　❸５年
❹課題を見いだしたり課題意識を高めたりする手立てとして有効である。学習内容と社会の出来事を結びつける役割に期待している。

●富山県
**大道　正敬**
（ダイドウ・マサタカ）
❶富山県西部教育事務所
❷国語　❸２年
❹子供は新聞記事を比較することで考えを深めていく。そのため、子供が興味をひく記事を常に探し、収集しておくことが大切である。

●京都府
**藤田　香揚子**
（フジタ・カヨコ）
❶京都市立羽束師小学校
❷全科　❸４年
❹めざす資質・能力の育成に向け、カリキュラム・マネジメントの充実を図るために、新聞を学校教育活動全体に活用していきたい。

●京都府
**宮澤　之祐**
（ミヤザワ・シユウ）
❶向日市立寺戸中学校
❷社会　❸10年
❹毎朝、Ａ３の紙に記事を１点貼り、短いコメントも付けて教室に掲示する。修学旅行に行く先の地方紙を取り寄せて使うことも。

●兵庫県
**川村　かおり**
（カワムラ・カオリ）
❶姫路市立豊富小中学校
❷全科　❸６年
❹教室・廊下・玄関・図書室…いつでもどこにでも新聞が当たり前のようにある風景を子どもたちと作り出すことが大切である。

●兵庫県
**中嶋　勝**
（ナカジマ・マサル）
❶尼崎市立南武庫之荘中学校
❷国語　❸12年
❹とにかく新聞に触れる機会を増やすことと、生徒の関心を引く記事や、授業者がぜひ読んでほしいと思う記事を紹介し続ける。

●兵庫県
**西村　哲**
（ニシムラ・サトシ）
❶西宮市立浜脇中学校
❷社会　❸17年
❹クラス全員に当番制で新聞記事を紹介させる。級友の発表を聞くことで、自分の知らなかった記事に出合い、世界を広げていく。

●兵庫県
**福田　浩三**
（フクダ・コウゾウ）
❶兵庫県立伊川谷高等学校
❷数学　❸11年
❹教育に活用する新聞作りに主眼を置き、教科・生活指導、人権教育、多文化共生等の学びを深める校内通信の研究・制作を行っている。

●兵庫県
**米田　俊彦**
（ヨネダ・トシヒコ）
❶愛徳学園中高等学校
❷国語　❸31年
❹新聞は人の手で運ばれる実感のある媒体である。授業で日常的に新聞を読み、自然と社会を知り、人間について深く考えていきたい。

●広島県
**杉原　しのぶ**
（スギハラ・シノブ）
❶尾道市立御調中央小学校
❷全科　❸10年
❹新聞を学校図書館の資料として位置づけ、学校で日常的に新聞に親しみ、活用できる環境整備と新聞の教材化の両面から実践を行う。

●広島県
**池田　昂樹**
（イケダ・コウキ）
❶安田女子中学高等学校
❷社会・地歴公民　❸５年
❹日頃、生徒が学んでいる学習内容が実社会に繋がっていることを意識させられるような記事の選定を意識して行っている。

●徳島県
**横山　武文**
（ヨコヤマ・タケフミ）
❶徳島市宮井小学校
❷国語　❸25年
❹小学校の学年の発達（教育心理学および国語教育学を援用しつつ）に応じて、新聞の活用を通じて身に付く学力を措定した学習活動を提案・展開している。

●長崎県
**髙島　敦子**
（タカシマ・アツコ）
❶長崎県立長崎明誠高等学校
❷国語　❸11年
❹まずは教員自身が楽しむこと、そして最初から欲張らないことが大切だと思っている。

# NIEアドバイザー紹介

❶学校名　❷担当教科　❸NIE実践歴
❹新聞を活用するうえでの工夫を一言
（敬称略）

●北海道
**佐藤　健翔**
（サトウ・ケント）
❶浜中町立霧多布中学校
❷社会　❸８年
❹新聞記事に情報収集媒体以上の価値を見いだし、表現などから社会情勢を捉えること。

●北海道
**庭瀬　奈穂美**
（ニワセ・ナオミ）
❶旭川市立春光台中学校
❷社会　❸９年
❹授業で学習した内容と社会的事象との繋がりの具体例を提示し、社会的事象に関心をもたせるよう工夫している。

●岩手県
**橋場　美和**
（ハシバ・ミワ）
❶九戸村立長興寺小学校
❷社会　❸10年
❹社会科の授業において、見出しを隠して内容に注目させ問題意識を高めている。地域の取り組みを具体的に捉える場面で新聞を活用することも多い。

●茨城県
**石塚　久美子**
（イシツカ・クミコ）
❶坂東市立長須小学校
❷全科　❸22年
❹新聞活用の日常化のため、各自の作品掲示箇所を確保。読む・考える・書く機会および意見交換の場の保障。何より継続が大切である。

●茨城県
**工藤　一二三**
（クドウ・ヒフミ）
❶つくば市立高崎中学校
❷社会　❸27年
❹生徒が日々新聞に触れることができるような環境整備に努めるとともに、授業で活用できる新聞記事等のストックを続けている。

●茨城県
**金澤　容子**
（カナザワ・ヨウコ）
❶元水戸工業高等学校
❷国語　❸42年
❹高校では国語表現、NIEコーディネーターを務めた新聞社では小中高で楽しい活動を工夫。今は幼児から高齢者に、新聞絵はがきや新聞ダンス等を展開中。

## NIEフラッシュニュース

**◇第29回全国大会京都大会の日程、スローガン等決まる**

京都市で開催する第29回ＮＩＥ全国大会は、２０２４年８月１（木）、２（金）の両日、「探究と対話を深めるＮＩＥ――デジタル・多様性社会の学びに生かす」をスローガンに開催します。基調講演は国際日本文化研究センター教授で歴史家の磯田道史氏に決まりました。

**◇23年度実践指定校に５３０校**

新聞協会は、全国のＮＩＥ推進協議会から推薦された５３０校を２０２３年度ＮＩＥ実践指定校に認定しました。実践期間は原則２年間。指定校ごとに配達可能な一般日刊紙を一定期間購読でき、購読料は新聞協会と各新聞社が負担します。また、11道県のＮＩＥ推進協議会では独自認定校として計47校を認定しました。

**◇第14回「いっしょに読もう！新聞コンクール」作品募集中！**

新聞協会は、気になった記事について家族や友達と話し合った上で、感想や意見を書いて応募するコンクールの作品を募集しています。小中高校生（高専含む）が対象で、締め切りは９月８日（金）必着。応募方法や過去の授賞作など詳細はＮＩＥウェブサイト（https://nie.jp/month/contest_newspaper/2023/）をご参照ください。

**◇「ＮＩＥはじめの一歩」シリーズに新動画加わる**

新聞協会は、これから新聞活用を始める先生向け動画「ＮＩＥはじめの一歩」シリーズに、メディアリテラシー編を新たに加えて公開しました。膨大な情報を吟味し、正しい情報を選択する力を育む重要性や、その能力を身につけるためのＮＩＥの方法について、関口ＮＩＥコーディネーターが解説しています。シリーズにはこのほか、「理論編」「実践編」「ＩＣＴ編」「ＳＤＧｓ編」「学力編」があります（https://nie.jp/teacher/）。ぜひご活用ください。

◀「NIE はじめの一歩」シリーズはこちら

# NIEでいきいき

本校1学年では、今年度から登校後の朝学習で新聞コラムの書き写しに取り組んでいる。10分間集中して所定のノートに書き写すだけではあるが、始めてみると「丁寧な文字で繰り返し書き写す」という作業のハードルが意外と高く、苦戦している生徒が多く見られた。

取り組み始めて2か月が経過し、生徒たちの集中力が少しずつ増してきたと感じる。当初は苦手意識を感じていた生徒も、漢字の読みや意味に意識を向けるようになってきた。読み手のことを考えて丁寧に文字を書くことの大切さも実感できてきたようだ。新聞を読む機会がない生徒が社会で起きているニュースに関心を持ったり、記者の考えを想像しながら読んだりする姿が見られるようになった。家族との会話の内容が広がったという話も耳にする。

現在は5日間で3日間分の書き写しを進めている。まだまだ負担に感じている印象を受けるが、継続することの大切さ、やり切ることの達成感を感じ、今後の学習活動に結び付けてほしい。卒業後に就職を希望する生徒が多い本校ではこれまで、3年次の履歴書作成指導に苦労していた。下書きをし、清書用の履歴書用紙に一字一句間違えずに正確に書くことが必要なため、新聞コラムの書き写しの経験が生きると期待している。コラムを通じて社会を知ることは、生徒の就職活動を充実させることにもつながるだろう。

始めて間もないので、どこまで目標に到達できるか手探り状態だ。現在のペースを維持しつつ、いずれはコラムの要旨をまとめたり、自分の意見・感想を書いたりできるよう、生徒たちの能力を伸ばしていきたい。

## 富山県立富山工業高等学校

教諭　作田　大志

◎富山県富山市／校長：篠原　俊一郎／生徒数：952名

◎特色：雄大な立山連峰を仰ぎ見る県都富山市のほぼ中心に位置し、ものづくりのスペシャリストの育成を目指して、日々の教育活動を行っている。1学年6学科8クラスの県内最大の公立高校で、2026年に、創校110周年を迎える。県内の製造業を中心に、7割近くの生徒が卒業後すぐに就職し、ものづくり富山を支えている。

朝学習でコラム書き写しに取り組む生徒たち

一文字一文字丁寧に

## 事務局長から一言

富山工業高校には電子機械や建築、土木など工学系6学科がある。昨年度の「ジャパンマイコンカーラリー全国大会」や「建築甲子園」で優勝を飾った実力校だ。

今春から生徒がコラムの書き写しに取り組んでいる。活字離れが常態化するなか、単なる苦行になってしまうのでは――と心配した。ところが寄せられたのは「漢字の読みや意味を学べ、社会の出来事も把握できる」という前向きな言葉だった。

コラムの肝は視点にある。社会の動きにどんな捉え方があるのか……。書き写しを続ける中で、書き手の考えを想像しながら借り物ではない一人一人の見方を身につけてくれることを願っている。（富山県ＮＩＥ推進協議会事務局長・筒口義裕）

# NIEあれこれ

中学生が地元企業で仕事を体験し、働く意義などを学ぶ「職場体験」。今年も新聞に興味のある生徒たちが、当社に来てくれる予定だ。残念ながら、昨年来社した4人は全員が自宅で新聞を購読しておらず、「祖父母の家へ行ったときに読む」と話していた◆私が入社した30年ほど前のトップ記事は、地方版でも百数十行の長文が多かった。近年は活字も大きくなり、情報がより凝縮されてコンパクトになった。それでも、ＳＮＳの短文になじんだ生徒たちには「記事は長くて難しい」そうだ◆日本新聞協会の調査では、日常的にＮＩＥを実践する学校は全国学力・学習状況調査（文科省）の平均正答率が全国平均より高い傾向にある。成績アップを少しだけ手伝えるかもしれないので、子どもたちにはぜひ、頑張って記事を読んでもらいたい。（三重県ＮＩＥ推進協議会事務局長・田中富隆）